

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点 ・ 個別人権課題をテーマとして効果的に取り扱った実践事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

奈良県北葛城郡上牧町

○学校名

上牧町立上牧中学校

○学校のURL

kamichu@lint.ne.jp

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年各5学級、【特別支援学級】2学級、【合計】17学級

○児童生徒数

【全生徒数】496人（平成26年11月25日現在）
（内訳：1年生160人、2年生164人、3年生172人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成25・26年度人権教育研究推進事業人権教育研究指定校

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

- 明るく笑顔の絶えない学校（魅力・活力のある学校）づくり
- 確かな学力・豊かな人間性・たくましい心身の育成
- 「命と人権をキーワードに」～人権を尊重する民主的な社会の形成者を育成～

【人権教育に関する目標】

- お互いの人権を尊重し合う「なかま」意識の高い生徒を育てる。
- 身の回りの不合理・矛盾・差別を見抜く豊かな感性と、それらを許さない意欲と実践力のある生徒を育てる。
- 自分を含めたすべての命を大切にできる自尊感情豊かな生徒を育てる。

○人権教育に係る取組一口メモ

「命と人権をキーワードに!」人権・部落問題学習をさらに豊かにする取組

○人権教育にかかる取組の全体概要

- ・ 学校の教育活動全体を通じて、生徒一人一人が日常生活の中で「人権」を意識できる取組や授業を展開する。
- ・ 教職員全員で人権教育に取り組めるよう、情報の共有や人権教材の開発、授業改善等、学年会議や職員研修を重ねる。
- ・ 家庭訪問を重視し、生徒の生活実態をしっかりと見つめ、保護者や地域の人々と共に生徒の成長を見守り続ける学校・家庭・地域の連携を推進する。

3. 特色ある実践事例の内容

本校は、学校教育目標に「人権を尊重する民主的な社会の形成者の育成」を掲げている。また、先鞭を付け長年培ってきた部落問題学習の実績がある。しかし、昨今はインターネットによる人権侵害が陰湿になり、いじめ問題も深刻な様相を呈している。人と関わることによって身に付くコミュニケーション能力が育ちにくい生活環境の中、差別が新たな局面を迎えていると言える。

また、家庭においては、保護者の意識・価値観の変化や経済状況による教育力の弱さや虐待などがあり、学校現場においては、教職員による体罰問題など、生徒の人権を侵害する事象はあとを絶たない。そういった事象が、親子間・学校家庭間の関係づくりを困難にしていく要因の一部になっている場合もある。

生徒の中には、急激な社会の変化の中で、自分の存在に自信を持てなかったり、他者との人間関係づくりに悩み、自分は傷つきたくないという気持ちから、自分を守る手段のひとつとして相手を傷つける言葉を発してしまったり、これくらい良いかと自分の都合を優先し、ルールを守ろうとしない生徒も見受けられる。

そのような中で、人権教育もこれまでの積み上げや実践を尊重しつつ、教職員の世代交代も視野に入れ様々な取組を創造していかねばならない。

そのためには、まず、教職員が生徒の生活実態をしっかりと見つめ、保護者がどのような願いを持っているのかという事実学び、差別の問題と自己の関わりを明らかにしていかなければならないと考えている。家庭訪問を重視し、地域の人々と一緒になって協議や活動をすることから関係を築き、家庭とともに生徒の成長を見守り続ける学校・家庭・地域の連携の取組を推し進めたい。そうして、部落問題学習を深化、発展させ、あらゆる差別に立ち向かっていく人権尊重の教育を更に一歩進め、生徒の人権意識を高める人権・部落問題学習を豊かなものとしたいと考え、以下のような取組を始めた。

○ 授業改善

一人一人の生徒の学習意欲を高め継続させるために、魅力ある授業・創意工夫のある授業・生徒が活躍できる授業を目指して授業改善に取り組む。研究授業や公開授業を増やし生徒の満足度の向上を図る。人権にかかわる授業を多く展開し、バリエーションを増やして生徒により深く身近な自分の問題として考えさせる取組を目指す。

○ 人権教材の開発

人権教育に関する旧来の教材以外に地域教材や時代に相応した教材など新しい教材を作成し、これを基に授業展開する。また、改善を加えた教材の蓄積を図る。

○ 放課後学習会の充実

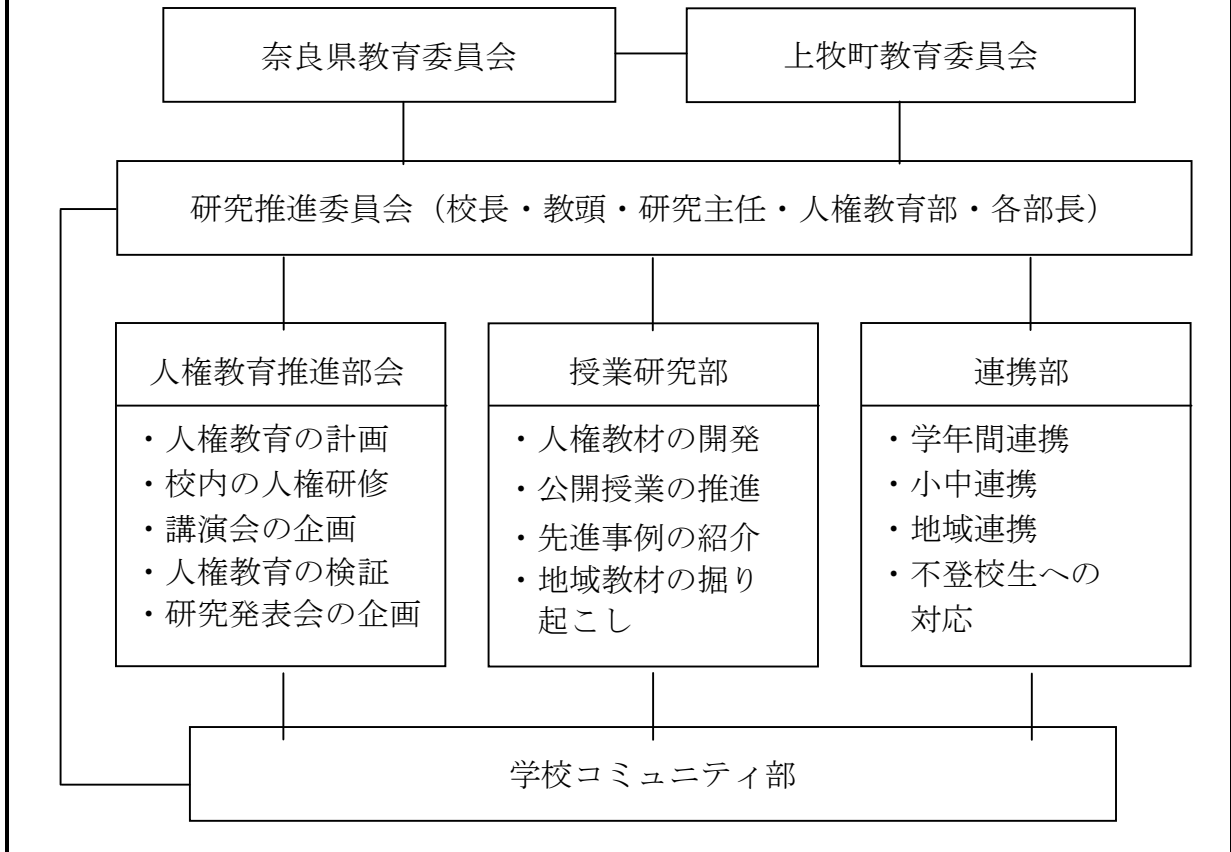
現在実施している放課後学習会を充実させ、ボランティア、教師間の連携の下、時間や回数を増やし、基礎学力の向上を図るとともに、自尊感情を育てつつ学習への自主的な取組を促す。

○ 地域におけるネットワークの構築と協働体制づくり

家庭訪問を基盤に学校と家庭の絆を深めるにとどまらず、連携を広げ、保育

園、幼稚園、小学校やP T A、卒業生、地域との協力体制をつくっていく。また、人権関連の授業や行事を発信していく。

人権教育を推進し、具体的取組を深めるに当たっては、個々の教師が個人で進めることも時には必要ではあるが、学校全体、教職員全体で課題を克服できる体制を作ることこそが重要であると考え、下図のような組織を編成した。



4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

「人権教育のための国連10年」が決議されて以降、これまでの同和教育の成果を取り込み、人権に関するテーマを設定した総合学習など、幅広い学習を展開してきた。その一つとして、様々な場面を活用して展開してきた部落問題学習があり、被差別の側に立たされた人の話を聞き、結婚や就職など身近に存在する差別事象などを学び、地域の生活や仕事に関する学習を深めてきた。

しかし、なぜ部落が存在し、差別されるようになったのか、そして、今もなぜ差別されているのかを追究する部落の歴史に関する学習（以下、部落史学習）が、ともすれば難解な語句の教え込みになり、遠い世界の出来事として、生徒が学ぶ必要性を感じない学習にしばしば陥りがちであった。

そこで、部落史学習を中心とした部落問題学習を通して、生徒が自身の生き方について考え方を深めるため、生活の中の身近な出来事と関連させた視聴覚教材やワークシートなどを活用し、部落差別について社会認識を深める学習を試みた。そして更なる学習の深化を目指して、総合的な学習の時間、社会科学習の時間などとの

関連をはかり、社会認識形成を目指した授業の開発をしていきたいと考えた。

5. 実践事例の実績、実施による効果

本校では、部落史学習を2年生の総合的な学習の時間などを活用し、社会科と関連づけて取り組んでいる。今回は「牛のかたき討ち」や「タイムトラベラー『ユキ』の冒険」など、奈良県内でよく使われている資料を用いて授業を展開した。

生徒にとって具体的な資料の活用により、単に歴史的事象を知識としてとらえるだけではなく、時代背景やその事象が起きた因果関係を明らかにし、その時代に生きる人々の姿や思いにせまることから、社会認識をさらに深めることができた。

また、班別学習の形態を活用して、話し合い活動を進め、お互いの意見を交流する場を設けるなど、学習方法にも工夫を加えたことで、学習に対する生徒の主体的な姿勢が生まれた。

以上のような学習活動を進めると同時に、自分自身としっかり向き合えない自尊感情の低い生徒や、相手の思いをなかなか受け入れられないまま、若しくは自分の思いを伝えきれないまま人との繋がりを持つようとする生徒に対しては、教職員が家庭との連携を密にした。学校生活におけるほんの些細な様子を伝えるときも、できるだけ家庭訪問をするように心がけた。そうすることで、生徒に一番近い位置にいて生徒を一番よく理解している保護者とともに、それぞれの生徒に応じた自尊感情の醸成に努めるということにおいて、成果を収めることができている。



6. 実践事例についての評価

今回の取組をきっかけに、教職員が一体となって人権・部落問題学習に取り組んだことは、教職員の人権教育推進への意識を高めることにつながっている。

「人権を尊重する民主的な社会の形成者」となっていく生徒たちが、人間の心がつくり出す差別の実態とその仕組みを知り、それとしっかり向き合えるように育つには、教職員が一体となり、強い信念と覚悟をもって、生徒や保護者との信頼関係を築いていくことが大切であると、改めて感じているところである。

今後、地域教材を具体化し、生徒たちに、より身近な問題として部落問題を捉えさせ、その解決のために主体的に行動できる学習に歩みを進めるという課題がある。上牧町には、人権の確立を目指して取り組んでこられた方々がおられ、その方々の活躍を知ることができる教材となりうる足跡がしっかりと残されている。まず、教職員が、そのような地域の歴史や人々の思いに触れる研修の場を持つことにより、さらなる地域教材の開発へとつなげたいと考えている。

次に、様々な人権課題に対する生徒の認識を深め、自分自身の課題として捉えさせるためには、以下の3点に留意し、取組を進める必要があると考えている。

- ① 従来から実践報告が多い地域教材を再評価し活用すること
- ② 総合的な学習の時間や「差別をなくす集会」などの学校行事と関連させるとともに、体験的な活動を組み込むこと
- ③ 社会科の歴史的分野と関連させ、課題学習を展開すること

いま、どんなきもち？

()月()日() 天気()
氏名()



ふいかえり: 感想(どんなことをしてどう思ったか)など

.....
 和自身結婚に対して不安はなかった。
 だけど、もし結婚相手の部落差別にあってる人だと
 思うと、親はどうなのかな、とか自分はどうするんだろうと
 考えるし、少し怖い。考えを改めることが必要だと思う。

参考資料: 感情ポスター「いま、どんなきもち？」(大阪府人権教育研究協議会)

いま、どんなきもち？

()月()日() 天気()
氏名()



ふいかえり: 感想(どんなことをしてどう思ったか)など

.....
 「味」というお話の中の 息子さんと華岡さん
 はあざい。そして、あざいと思った。
 妹も部落だよねと気がしない、というふうな発言
 で、親は自分たちのグライド?おたいたもの?
 差別しないで、おかしい。周りの目を気にして
 はかりたいわ、結局何も進まないと思う。
 少しあざいでも差別はなしていいことは大切だと思う。

また、研究授業の在り方を工夫したり、その回数を増やしたりするとともに、生徒の「こんな授業を受けたい。」という希望を聞き取ることから、授業の有り様を見つめ直し、教員の力量を更に高め、授業改善を進めていくことも必要である。

さらに、現在、実施している放課後学習会を更に充実させ、生徒の基礎学力の着実な向上を目指したい。

そして、本校の取組を、校区内の保育所、幼稚園、小学校、そして家庭や地域に発信し続け、校種間連携・地域連携をさらに進め、子供たちの課題を熟議し、互いに協働した取組を進める必要があると考えている。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

上牧町立上牧中学校

「人権を尊重する民主的な社会の形成者を育成する」ことを目標に、部落史を中心にした学習を通して部落差別についての社会認識を深める学習を進めている。

特に、総合的な学習の時間と社会科の学習の時間の関連を図ることや、生徒の生活と身近な出来事を関連させた視聴覚教材やワークシートを活用すること、班別学習により話し合い活動を大事にするなどの指導方法の工夫や授業改善に取り組むとともに、日常的には家庭や地域との連携も大事にしている。例えば、学校生活における些細な様子を伝えるときも家庭訪問をするように心がけ、保護者と一緒になって生徒に応じた自尊感情を醸成していくことにも努めている。「人権教育の推進に関する取組状況の調査結果」から、家庭・地域との連携や、中学校での生徒理解や指導に関する研修等の不十分さが明らかになっているが、そうした状況の改善に資する参考事例である。